OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	第4章　在日フィリピン人たちのトランスナショナルな実践 : 調査者の位置も交差させて
Author(s)	永田, 貴聖
Citation	阪大ふくふくセンター 研究・実践シリーズ 1　日本のなかの東南アジア : 移民第2世代に注目して. 2026, p. 65-76
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104100
rights	This article is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-NoDerivatives 4.0 International License.
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

第4章　在日フィリピン人たちのトランスナショナルな実践
――調査者の位置も交差させて

永田　貴聖

I.　はじめに

本論では，京都市南区東九条に集うフィリピン人たちが展開する「フィリピン」という国家・民族を通じた紐帯を基盤として，移住社会のマジョリティや，他国出身の移住者たちと関係を形成する「トランスナショナル」な生き方について注目する。

ここでの「トランスナショナル」の定義は，永田［2020］が掲げている2つのトランスナショナルリズムのうちの1つであるフィリピン人移住者たちが移住先において，フィリピン人グループでの自助活動を通じて，移住先のマジョリティや他国出身の移住者たちと複数ナショナリティ・エスニシティ関係を形成しながらフィリピン人の関係性を拡大することとして注目する。

日本にはカトリック教会等を基盤とするなどしてフィリピン人移住者当事者互助グループが多く存在している。これらは，来日してすぐのフィリピン人にとっては，日本社会とつながるきっかけともなり，長年日本に在住するフィリピン人にとっては「フィリピン」とのつながりを通じて，同胞たちとの関係を維持すること，さらに，他国出身の移住者たちと関わり，複数のエスニシティとナショナリティが交差させる実践を展開する場にもなってきた。

ここでは，京都市南区東九条にあるカトリック系国際交流施設に集まるフィリピン人移住者たちが「フィリピン人」であるがゆえに，地域にいる他のエスニシティとナショナリティを持つ人びとと関わり，社会関係を広げる実践の中身を紹介する。

そして，研究の対象となる移動してきた人々の社会関係には，調査する研究者も含まれている。研究者は人々の行動に様々な点で大きな影響を及ぼす。また，人々も研究者の行動や思考を左右する。特に，近年の日本では，海外から移住してきた人々の次世代が研究者となり，自身の出自であるエスニシティ・ナショナリティ集団を調査対象とすることもあれば，出自とは別のエスニシティ・ナショナリティに注目することもある[(1)]。これらの活動は，研究者自身の行動や思考に影響する。本論では，このような研究者自身の位置の

動態についてもあわせて検討する。

II. 「移民研究」の限界と問題点

ある特定の移民集団を研究対象とする調査や，地域研究には共通している限界がある。研究者は 1 つか多くても 3 つ程度の地域・社会の言語や文化，慣習にしか対応できないことが多い。特に，フィールドワークを実施し，そこで得た情報を基に分析する文化人類学や社会学の研究者たちはある特定の国や地域の「専門」を設定して，その対象となる国・地域・社会の言語や文化，習慣の習得に励む。

移民研究もまたある特定の国・地域・社会からある特定の地域に移動してきた人々の移住後の様々な状況に焦点を当て，調査を実施する。そのため，移民研究者は，人々の言語や文化，習慣を習得する必要が求められる。ここで，問題なのは移住先の地域に複数のエスニシティ・ナショナリティ集団が存在する場合や，ある特定のエスニシティ・ナショナリティ集団のみが存在し，後から別の集団の人々が顕在化してきた場合に，新たな対応に迫られることである。この時の対応としてはいくつかの方法が考えられる。1 人の研究者は，複数集団の存在を一旦留保して，自身が専門とする国・地域・社会出自の集団のみに特化した調査を継続する場合がある。しかし，これはベルが指摘するように「擬似 - 国民国家的な枠組みで移住共同体を見るという傾向［ベル 2016: 107］」に陥り，結局は特定のエスニシティ・ナショナリティ集団内の関係分析の移民調査に留まってしまう。

一方で，1 人の研究者が複数集団の存在を認識して，専門とする国・地域・社会出自の集団のみに注目しながらも，新たに登場した別の集団に注目し始めて，どうしたものかと右往左往することもあるだろう。

本論において取り上げる地域では，京都市を拠点に活動していたフィリピン人グループの関係者が，在日コリアンの集住地域として映画の舞台にもなった京都市南区東九条に位置する多文化交流施設で活動を開始した。フィリピン人グループが当該地域に活動を始めたことにより，フィリピン人たちも以前から，この地域に一定数居住していたことが判明した。ここでは紙面の都合上, 他の事例は挙げないが, この様に複数のエスニシティ･ナショナリティ集団が混在する状況は決して少なくない。

当初，筆者は，この京都市を中心として活動するフィリピン人グループの動向や，そこで活動する人々に焦点を当てて，研究してきた。フィリピン人グループの人々が，当該地

域で活動を始めるようになったのは，後述するが，筆者とフィリピン人たちとの関わりが契機となっている。筆者の友人である当該地域で研究活動を行う他の研究者を通じて，フィリピン人グループの人々が東九条の多文化交流施設である京都市地域多文化交流ネットワークサロンで活動することになった。気づけば，筆者が古くからよく知るフィリピン人たちがそこで活動を始めていたのである。これは清水の言うところの「巻き込まれる」ことの結果なのである［清水 2013］［永田 2017］。

筆者はすでに他の論考においても言及しているように韓国・朝鮮半島にルーツを持つ移民研究者である［永田 2011; 2016］。朝鮮半島にルーツをも持ちつつ，フィリピン人移住者の研究をしている学者が，フィリピン人を追いかけていたら，在日コリアンの集団に遭遇した。

前述したように，ここ数年，海外にルーツを持つ，日本生まれ育ちの次世代の研究者が登場しつつある。このような次世代の移民研究者にとっては，鍛錬してきた学術的能力とルーツに起因する経験が混在することから逃れられないだろう。そのような状況に直面する研究者は客観性だけでは現象を解釈できない調査対象と自己の間にある経験を右往左往することで作られる新しい知見を生み出すことができると推測する［Rosaldo 1993］。

III. 在日コリアンの街「東九条」での「フィリピン人」の活動

京都市南区の東九条と言えば，在日コリアンの集住地域であることでよく知られている。話題となったのは，映画『パッチギ』である [(2)]。この映画には，1960 年代後半から 70 年代前半を舞台として，当該地域にある朝鮮学校に通う在日コリアンの若者と日本人の関係が，時には衝突を含めて，細かく描かれていた。

この地域には，在日コリアンの住民が約 2 割程度暮らしていると言われている。戦前から労働者が集まり，その関連で在日コリアンたちが集まるようになった。戦後，社会が復興し，京都市においても生活基盤となるインフラや道路が整備されるようになり，生活が向上した。しかし，当該地域には貧しい人々が集まり，河川敷などにバラック小屋の住居を建てて生活し，行政による開発も進められなかった。そのため，1950 年代頃から，カトリック教会やキリスト教会のクリスチャンの活動家たちが中心となり，地域の生活環境の改善のための運動を展開していた。現在では，地域内に多くの市営団地が建設された［山本 2012］。

なぜこの地域でフィリピン人たちがさまざまな活動を行うようになったのかを説明したい。2011 年 11 月頃，この地域にある社会福祉法人「希望の家」が京都市の指定管理者事業として行う「京都市地域・多文化交流ネットワークサロン（以下，ネットワークサロン」を拠点として，研究活動をしていた社会学者である山本崇記さん（以下，山本さん）からある打診の連絡があった。内容としては，筆者が関わっているフィリピン人グループがネットワークサロンの登録団体となり，施設を活用してほしいという要請であった［永田 2017; 2018］。筆者は京都市内のカトリック教会を中心に活動していたフィリピン人グループ関係者に相談することにした。まず，フィリピン人グループの主要メンバー 1 人と筆者，さらにネットワークサロンの所長，山本さんの 4 人で話し合いを行った。その後，フィリピン人グループの主要メンバー複数で，再度訪問した時に，フィリピン人グループが登録団体となり，施設を利用しはじめることが決まった［永田 2017; 2018］。

この施設は，同じ敷地内に児童館，ネットワークサロン事業を行っている。約 60 の登録団体があり，それら登録団体が様々な国際交流活動を展開している。その他に，外国人住民向けの日本語教室，地域住民向けの韓国語教室，外国人移住者問題についての企画，年に 3 回のお祭り，高齢者向けのカフェスペースもあり，昼食でも利用できる［永田 2018］。

フィリピン人グループが施設を利用する利点は大きかった。当時，グループは独立記念日やクリスマスにはパーティーを行っていたが，教会の施設が使用できない場合の場所探しに苦労していた。また，フィリピン人グループは教区内で行われる英語での礼拝を手伝っていたが，教区内での英語礼拝を行う教会が年ごとに変わるなど，拠点づくりが難しい状況であった［永田 2018］。

この施設の運営母体である「希望の家」は，1959 年にカトリック教会の京都教区内の外国人神父が地域の生活向上ための「共助組合」として結成された［永田 2018］［山本 2018］。その後，「希望の家」はこどもたちへの補助学習や給食支援にはじまり，1967 年には「希望の家」保育園を設立した。近年では，多文化保育を実施し，韓国朝鮮，フィリピン，ベトナム，ネパールなどにルーツを持つこどもたちが通っている。1973 年には児童センター（のちの児童館）が開設された。また，在日コリアンの文化活動や 1 世たちに聞き取り調査を実施し，記録したものを製本するといった活動を展開している。さらに，1986 年に結成された民族楽器演奏と劇を中心とする朝鮮民族芸能の活動集団である「ハンマダン」のメンバーも「希望の家」の活動に深く関わっている。

VI. フィリピン人グループの活動

2012 年 4 月から, 京都の河原町カトリック教会を拠点とするフィリピン人グループがネットワークサロンにおいて本格的に活動するようになった［永田 2018:164-173］。施設を活用することになった要因としては，当時このグループの幹部メンバーの一部が近隣に暮らしており，「希望の家」の活動をよく知っていたこと，「希望の家」がカトリック系の社会福祉法人であること，さらに，当時英語ミサを担当していた外国人神父と「希望の家」が親密な関係だったこと，そして，使用の自由度が高いことであった［永田 2018:164-173］。

教会施設は，多くの人が利用するため，予約が取れないこともあった。また,「希望の家」がカトリック系の社会福祉法人であったことはカトリック信徒が多いフィリピン人に大きな親近感を与えた (3)［永田 2018:164-173］。

この時期からフィリピン人グループの活動も変化する。イースターやクリスマス，黙想会などは教会で行い，それ以外の信仰と関連しない行事をネットワークサロンで開催するようになった［永田 2018:164-173］。6 月 12 日のフィリピン独立記念日付近に開催される記念パーティーや，クリスマスパーティーなどである。さらに，2012 年から 2015 年頃までは, フィリピン政府機関である Commission on Filipino Overseas（海外フィリピン人委員会）が京都市内在住のフィリピン人向けにセミナーを開催するなど，フィリピン人グループ主催ではないものの，関連する企画が共同で実施されてきた［永田 2018:164-173］。

しかし，2017 年ごろから，フィリピン人グループが主催する企画が徐々に減少し始めた。原因は，主要メンバーたちが本業や私生活で多忙になったことであった。この頃から，東九条付近に住んでいるフィリピン人たちがネットワークサロンで，フィリピン人グループとは関係なく，小規模な活動をはじめるようになった［永田 2018］。例えば，近隣のフィリピン人たちが集まり，ギターグループを結成し，練習をネットワークサロンで部屋を借りて行い，施設の季節ごとのまつりで演奏を披露することや，希望の家保育園にこどもを通わせること，ネットワークサロンが主催する日本語教室に積極的に出席することなどであった［永田 2018］。このギターグループは，30 年以上開催されている。「東九条マダン (4)」にも出場している。東九条マダンは朝鮮半島の農楽演奏サムルノリやプンムルノリ,「マダン劇 (5)」と呼ばれる野外に特設の円状舞台を設け，舞台全体を観客が囲む形式の演劇，関連する装飾，特設ステージなどで構成されている。そして，東九条マダンのプンムルノリに演奏者として参加するギターグループのメンバーも現れるようになった［Seiger and Nagata 2020］。

V. 「巻き込まれる」ことから「介入」へ

2012 年以降，気がつけば筆者も，フィリピン人たちとともに東九条地域に関わるようになった。2016 年，フィリピン人ギターグループのメンバーたちは東九条マダンのステージで演奏することになった。また，彼らは，筆者が朝鮮半島にルーツを持つことを知っているのか否か定かではなかったが，東九条マダンの活動に参加するよう筆者に進言した。これに従い，筆者は実行委員会に参加することになった。2018 年にはマダン劇にも出演するという無謀なことにも挑戦した。

この時期，筆者の「研究者」としての資源を活用した企画もネットワークサロンにおいて開催した。その一つが 2017 年 11 月 11 日のネットワークサロン秋まつりの際に開催した「韓国・ソウルこどもの部屋体験」である。

これは希望の家保育園の先生方，筆者の母校（学部時代）の大学生 2 名（うち 1 人は韓国人留学生），そして，韓国での外国人移住者を研究している文化人類学者であるベル裕紀さんたちの協力のもとに開催した。当時，筆者の勤務先であった国立民族学博物館にある異文化体験貸出キット「みんぱっく」の「ソウルスタイル　こどもの一日 (6)」，「ソウルのこども時間 (7)」を用いて，韓国の小学校高学年から中学生ぐらいのこどもを想定した部屋を再現した。さらに，モニターを持ち込み，国立民族学博物館のビデオテーク映像「韓服，今を着る」，「2014 韓国の初誕生祝い」，「韓国の『もう一つの』産後習俗の空間―産後調理院」を放映した (8)。

開催時間中，韓国の絵本を翻訳したものを朗読する時間や，「ユンノリ」という韓国のすごろくで楽しむ時間を設けた。BGM として，当時の韓国でこども向けの曲として流行していた「サメ家族 (9)」を流した。絵本の朗読は，希望の家保育園の保育士の方に担当いただいた。そして，当日は「多文化保育」の時間の一環として，希望の家保育園の園児たちも訪れた。園児たちは，すでに「多文化保育」で，ユンノリなどは体験しており，この日も楽しんでいた。この企画には，近隣に住むフィリピン人たちも訪れ，時間を過ごした。

この企画を実施するにあたり，希望の家保育園の園長先生，また，保育士の皆さんと複数回の打ち合わせを重ねた。筆者にとってはネットワークサロンで活動するようになったフィリピン人たちにも来てもらい，地域に多くの朝鮮半島にルーツを持つ人々がいることを知ってもらいたいという狙いがあった (10)。園長先生には事あるたびにこの企画の趣旨について再確認の質問をいただき，良い意味で緊張感がある集まりとなった。

VI. フィリピン・ルーツをもつ次世代たちとの協働

次に，東九条に住むフィリピン系2世たちとの協働活動を紹介したい。2020年2月9日にネットワークサロンで実施した「東九条にゆかりある海外などにルーツを持つ若者の集まり」である。

この企画が考えられたのはフィリピン人女性Mさんの存在が大きい。彼女は，東九条地域に長く在住し，地域事情をよく知っている。上述のフィリピン人グループがネットワークサロンを利用することになったのは，当時，Mさんがフィリピン人グループの幹部メンバーだったことが非常に大きい。そして，その後もMさんは，ネットワークサロンの職員の方々や，東九条マダンのメンバー，地域の人々とフィリピン人の橋渡し役的存在になっていた。筆者は大学時代に関わっていたフィリピンが好きな人々の集まりでMさんと出会って以来，細々ながら交流があった［永田 2010］。しかし，交流が本格的にはじまったのは，彼女がフィリピン人グループの幹部メンバーに選ばれた2010年頃である。それまで，Mさんも子育てで多忙であり，フィリピン人グループの活動には年に1～2回参加する程度であり，筆者がフィリピン人グループと関わったころは，別のフィリピン人たちから彼女についての風の噂を聞く程度だった。

ところが，フィリピン人たちがネットワークサロンの活動に関わるにつれて，Mさんの役割が大きいものとなった。Mさんと筆者には共通に知人たちがいて，その1人がNくんであった。Nくんは，筆者の別の活動で彼の母親とともに出会ったフィリピン・ルーツの次世代である。最初に出会った時，彼はまだ小学校5年生だったが，20代後半に成長していた。偶然にもMさんとNくんの2人は近所同士であった。Mさんと話していると彼のことがたまに話題になった。2019年11月頃，Mさんが近隣に居住しているフィリピン・ルーツの次世代たちを集めた企画をしたいと筆者に話した。

そこで，筆者はNくんに久しぶりに連絡を取ってみることにした。そして，NくんにMさんと筆者が，近隣のフィリピン・ルーツの次世代を集めた企画がしたいと相談した。すると，Nくんはやはり Mさんも知る4歳下のKくんに連絡を入れた。さらに，Kくんより2歳上の姉Tさんもやってきた。Mさんはやはり近隣に住むこの姉弟や彼らの母親をよく知っていた。そして，彼らや，Mさんがかつて居住していた近隣には，フィリピン・ルーツだけではなく，さまざまなルーツを持つ次世代の若者がいることがわかった。その結果，「フィリピン・ルーツ」に限定することなく，対象をあえて曖昧にして，「海外にルーツを

持つ若者」ということにした。ここに M さんの長女 J さんも加わった。J さんはこどもの頃にフィリピンに数年間滞在しており，タガログ語が堪能である。その後，M さんが京都大学教員である安里和晃さんにこの企画について話したところ，ゼミの院生たち数名も関わるようになった。

結局，準備会として，M さん，長女の J さん，N くん，K くん，姉の T さん，院生たち，そして，筆者と約 2 週間に 1 回の頻度で，毎回 8 人程度集まり，さまざまなことを話した。準備の会議というよりも雑談であった。

本番である 2020 年 2 月 9 日には，いつもの 8 人に，M さんや筆者が良く知る東九条出身の男性 2 名，NPO 職員の韓国人女性 1 名，M さんと筆者が良く知る妻がフィリピン人の男性 1 名，J さんが誘った近隣に住む女性の友人 1 名（ルーツは不明），安里先生のゼミ生 3 名，筆者という構成だった。たこ焼きを作りながら，話すという趣旨で，一応「あなたにとってのルーツとは？」というテーマを設定していたが，話はいつの間にか準備会と同じように，近況についての雑談や，将来についての話となった。印象的だったのは，K くんの「フィリピン」体験と生まれ育った地域である東九条への想いである。彼は，地域内にある韓国系学校を前身とする私立高校出身であり，ハングルが読めることを誇らしく語り，初めて行った海外は高校の修学旅行で行った済州島であったことや，次に行った外国が母親の実家があるフィリピン北部であったことを何度も話してくれた。また，東九条マダンに毎年行っていることも誇らしく説明してくれた。

その後，このような集まりは新型コロナウィルスの感染症の拡大による行動制限や，それぞれのメンバーの転居などにより，行われていない。しかし，この様な会を開催したいと述べていた M さんは次の活動に向けて準備をすすめていた。

VII. その後の「東九条」とフィリピン人たち

その後，先述した M さんは，ネットワークサロンの近くに作られたコミュニティ・カフェ H のスタッフとして活動するようになった。このカフェは，地域の高齢者や障がい者，外国人住民などさまざまな人々が交流するための拠点となることを目指している。東九条マダンなどに関わっている地域の市民活動家たちがコロナ前の 2018 年 10 月に集まり，NPO として結成された。開店時間は午後 3 時から 9 時までである。これはネットワークサロンの中にあるカフェテリアの閉店が午後 3 時であり，そのあとはこちらに集まってほしいと

いう意図もある。M さんは 2019 年頃からスタッフとして活動している。カフェは，比較的安価なメニューをそろえている。コーヒーのほかに，ビール，ハイボールなどのアルコール類，おでん，カレー，うどん，缶詰，駄菓子などの食べ物がある。店内には狙い通り，地域の高齢者や，近隣の障がい者施設を利用する人々などが集まっている。M さんがスタッフとなり，第 2 と第 4 の土曜日は，フィリピンランチが販売されている。M さんのほかに，ネットワークサロンの登録団体であるフィリピン人グループのメンバーの一部が料理を担当することもある。また，店では，フィリピンの調味料や，インスタント・ラーメン，缶詰なども販売しているため，近隣のフィリピン人たちそれを購入するために頻繁に立ち寄っている。

2020 年に流行した新型コロナウィルスによる行動制限時は，カフェとしては営業ができず，有機酵母のパンや，近くの作業所がつくった韓国料理などの持ち帰り品の販売していた。また，インターネット放送が企画され，番組には，前述したフィリピン人ギターグループも出演している [(11)]。そして，週によってはインドネシア人が臨時スタッフとして料理を担当し，インドネシア料理が振る舞われるときもある。その後，カフェは東九条マダンにも出店し，フィリピン料理を販売している。

現在，M さんはここで新たな試み行っている，2023 年頃から，海外にルーツを持つ小学生のこどもたちや，新規に移住してきた外国人のこどもたちを集め，大学生のボランティアたちとともに，こどもたちの学習教室を週に 1 回開催している。こどもたちのみを対象にしているが，日本語を勉強したいこどもの親たちも参加することがある。また，地蔵盆などのイベントも行われている。今後もこの動向に注目する必要がある。

VIII. まとめ―今後の「東九条」

本論では，京都市南区東九条にあるカトリック系国際交流施設であるネットワークサロンに集まるフィリピン人移住者たちが，地域にいる他のエスニシティとナショナリティを持つ人びとと関わり，社会関係を広げる実践の中身を考察してきた。この事例は，フィリピン人たちが移住先のマジョリティや他国出身の移住者たちと複数ナショナリティ・エスニシティ関係を形成するという，いかにも学術的に分析できるかもしれない。また，この事例を考察する筆者は，あくまでも観察者に徹し，フィリピン人たちの動向のみ記述することも可能である。しかし，筆者自身もこの東九条地域で活動するフィリピン人たちと深

く関わり，様々な試みを実践してきたのも事実である。さらに，研究者である筆者自身も何らかのルーツがあり，特定の文化や価値観を備えた人間である。そのことを念頭に置き，本論では，あえて筆者の活動も可視化した。

確かに，ある特定のエスニックメディア・ナショナリティ集団の動向のみに特化する分析を実施することも可能であろう。しかし，そのような調査の位置を取ってしまうと見えない現実があることも確かである。本論で取り上げたのはその現実を可視化する試みと言える。

また，さまざまな実践が展開されている東九条地域の諸活動にも賛否があることは確かである。東九条マダンに参加すると多くの大学研究者や運動家など高学歴な知識人と出会う。一部の地元民からは「あの祭りはインテリが作った祭り」という視線がある。もしかしたら，フィリピン人同士の中にもそういう視線があるかもしれない。このようなことも含めこの動向が街全体のどのような人々による試みなのかを賛否両論含めて注視する必要がある。

現在，新たな現実にも直面している。東九条地域は，在日コリアンの街でも，外国人移住者たちの街でもなくなりつつある。京都駅の南側に位置する地域であるため，宿泊施設が乱立し，多くの観光客が訪れている。これ自体は問題ではない。しかし，その結果，実際に地域で生活する人々のための施設や商店が減少してきている。実際, 地域にはスーパーマーケットがなく，京都駅前の大型商業施設にあるスーパーマーケットは徒歩で 15 分ほどかかる。また，東九条マダンは，東九条地域内にある廃校になった旧小学校を巡回し，会場としている。もし，旧小学校が商業施設になってしまうと東九条マダンはどうなってしまうのだろうかと思う。東九条地域が複数のエスニシティ・ナショナリティ集団が混在し，さまざまな実践が行われる場所でありつづけることができるのか今後も継続して注目しなければならない。

注

(1) 特に近年では，ブラジル系やペルー系の次世代を担う研究者たちが活躍している。

(2) 2004 年に製作され，2005 年 1 月に公開された。井筒和幸が監督を務めている。タイトルのパッチギは韓国語で「박치기」であり，「突き破る」，「乗り越える」，ほか「頭突き」の意味がある。1968 年頃の日本人の高校生と当時，京都市南区東九条にあった朝鮮高級学校の学生の衝突や友情を描いている。女優の沢尻エリカが朝鮮高級学校生

の 1 人を演じており, この作品は沢尻の「出世」作となった。続編である『パッチギ！ LOVE & PEACE』が 2007 年に公開されており，内容も『パッチギ』の続編であり，こちらは 1974 年頃が舞台となっている。

(3) カトリックではないキリスト教徒のフィリピン人も一部いるが，ネットワークサロンとは深く関係している。

(4) 毎年，10 月下旬が 11 月 3 日に東九条地域の小学校が小学校跡を巡回で開催している。2025 年 11 月 3 日に開催で 33 回目となった。詳細は東九条マダン公式ページを参照されたい。「東九条マダン公式ページ」2025 年 11 月 30 日アクセス。 https://www.h-madang.com/。

(5) 韓国語で「마당（マダン）」は「広場」であり，野外や公園などに設置し，観客との一体感を重視する。

(6) 2002 年制作・朝倉敏夫・佐藤浩司，2013 年改訂・呉屋淳子，そして，2024 年には，「韓国のこども時間―日常と伝統」が製作され，刷新された。詳しくは［国立民族学博物館ウエブサイト「韓国のこども時間―日常と伝統」2025 年 11 月 30 日アクセス。https://www.minpaku.ac.jp/teacher/school/minpack/contents/korea3］を参照されたい。

(7) 2013 年制作・呉屋淳子

(8) これらは，韓国国立民俗博物館などと共同で制作している。詳しくは次を参照されたい。「国立民族学博物館ビデオテーク」2025 年 11 月 30 日アクセス。https://htq.minpaku.ac.jp/databases/videotheque/

(9) 韓国語では「상어 가족」と書く。

(10) また，この企画は，韓国のニュース専門チャンネルである YTN にも取材を受けた。映像は，次から視聴できる。2025 年 11 月 30 日アクセス。https://www.youtube.com/watch?v=5S4H7_z-HLU

(11) 詳しくはこちらを視聴されたい。2025 年 11 月 30 日アクセス。https://www.youtube.com/watch?v=L42PJgEJ7qo

参考文献

ベル裕紀．2016.「通り過ぎること，埋め込まれること―韓国・安山市におけるカンボジア人移住労働者団体の設立過程を事例として」『年報人類学研究』6:104-31.

永田貴聖．2010.「日比間でトランスナショナルになるフィリピン人たち」『生存学』2:192-206.

———. 2011.『トランスナショナル・フィリピン人の民族誌』ナカニシヤ出版 .

———. 2017.「巻き込まれてゆくことからみえる在日フィリピン人移住者たちの社会関係」渡辺公三 石田智恵 冨田敬大編『異貌の同時代―人類・学・の外へ』309-38. 以文社 .

———. 2016「『韓国』を消費するだけではない日本人の存在―政治的な日韓関係を超える関係についての試論」『生存学』9: 94-107.

———. 2018「宗教関係施設を通じたフィリピン人移住者たちのネットワーク―京都市・希望の家を事例に」高橋典史　白波瀬達也　星野壮編『現代日本の宗教と多文化共生―移民と地域社会の関係性を探る』155-179. 明石書店 .

———. 2020.「2 つのトランスナショナル―フィリピン人移民研究からの視点」『移民研究年報』26: 51-64.

Rosaldo, Renato. 1993. Culture and Truth: The Remaking of Social Analysis. London: Routledge.（1998『文化と真実ー社会分析の再構築』椎名美智訳 . 日本エディタースクール出版部 .)

Seiger, Fiona-Katharina and Atsumasa Nagata. 2020. “Hosting Migrants in Kyoto City: Different Migrant Cohorts and Mutual Support.” Global Perspective Vol. 1, https://doi.org/10.1525/gp.2020.13331

清水展. 2013.『草の根グローバリゼーション―世界遺産棚田村の文化実践と生活戦略』京都大学出版会 .

山本崇記. 2018.「被差別部落 / 在日朝鮮人コミュニティにおけるキリスト者の実践―「地域化」と「内部化」という相互作用―」高橋典史・白波瀬達也・星野壮編『現代日本の宗教と多文化共生―移民と地域社会の関係性を探る』135-154. 明石書店